

平成二十三年五月十三日

## 若者から国防意識を奪い去る歴史教科書の実態

日本兵法研究会 会長 家村和幸

### ■国のために戦わない日本人を育ててきた戦後学校教育

世界価値観調査によれば、「もし戦争が起こったら国のために戦うか」という質問に、「はい」と答える割合は、日本が十五%で世界最低であるという。国家が国民に対して、自国の歴史教育を通じて祖国への誇りと国防意識をはぐくむことは、国家が存続していく上で必要不可欠である。これこそが世界各国の常識であるが、しかし唯一、わが国においてのみ、真っ当な国家観や歴史観を持った健全な日本人を育成すべき教育の現場において祖国を貶める自虐史観を植えつけ、常に国や社会よりも自分第一で考える無国籍人を輩出するような歴史教育が行われてきたのではないだろうか。このような疑問から、本稿では、「いざというとき、祖国を守るために戦おうという意識（＝国防意識）」という観点で中学校で使用される歴史教科書を検証し、その実態を明らかにする。検証に当たっては、元寇や十六世紀のヨーロッパ人来航など、わが国の古代から近世における国防上の重大な出来事に関連する記述について、販売シェア第一で、最も影響力の大きな東京書籍の教科書と、シェアは僅かながらも他社の教科書とは一線を画する独創的な内容で知られる自由社及び育鵬社の教科書を対比しつつ、若干の考察を加えるものとする。

### ■歴史教育を通じて国防意識をはぐくむための三つの視点

今日、ある国家が平和と独立を維持して存在し、国民に自国の歴史を教育できるということ自体が、永年にわたる「国防」の成果である。こ

のように本来は、国家の歴史を教育することは、必然的に国防意識をはぐくむものなのである。それは同時に、虚偽に満ちた反国家的な歴史教育により、「国家=悪」の概念を刷り込み、その国民から国防意識を効果的に奪い去ることができるということでもある。これらを見極め、歴史教育を通じて健全な国防意識がはぐくまれているか、逆に阻害されているか、を判断するには、次の三つの視点からの観察がきわめて重要である。

- ① 「国家」主体に歴史が構成され、自国を「守るべき価値あるもの」としているか。
- ② それぞれの時代における国家の生存に対する「脅威」を正しく認識しているか。
- ③ その脅威に対して国家・国民がいかに「対処」したかを正しく伝えているか。

本来、「脅威」とは、内外の敵勢力から受ける侵略や国体破壊のみならず、台風、地震、津波などの自然災害も含まれるものであるが、本稿では日本に対する直接・間接の侵略を企図する「敵国」に限定して用いる。

『①「国家」主体に歴史が構成され、自国を「守るべき価値あるもの」としているか。』に関しては、いずれの歴史教科書も全編の冒頭や最後の部分で歴史を学ぶ意義や歴史のとらえ方などを総括的に述べているので、まずはこれらを比較してみよう。

## ■地球市民の「友愛」を語る東京書籍、日本国民の「国防」を論じる自由社・育鵬社

東京書籍の歴史教科書では、序章『歴史のとらえ方』に「国民」や「日本」を主語とした文章が存在せず、歴史の主体を「人々（個人）」とし

ている。それゆえに、全編を通じて国家概念を軽視し、個人への迫害を羅列した「人権史」のようになっている。これに対し、自由社の歴史教科書では、冒頭『歴史を学ぶとは』で『世界のどの国民も、それぞれ固有の歴史をもっています。・・・欧米列強諸国の力が東アジアをのみこもうとした近代にあつては、日本は自国の伝統を生かして西欧文明との調和の道を探り、近代国家の建設と独立の維持に努力しました。しかし、それは諸外国との緊張と摩擦をともなうきびしい歴史でもありました。』と述べ、育鵬社の歴史教科書では、序章『歴史の世界を旅してみよう』で『ところで、私たちの国の歴史には、平和な日々も激動の時代もありました。豊かな文化が花開いた季節も、戦争や内乱で国土が荒れた時期もありました。・・・そして、歴史の旅を進めていくと、私たちが住んでいる日本という国は、古代に形づくられ、今日まで一貫して継続していることに気づくと思います。その理由は何なのかを考えてみてください。』と述べている。このように、自由社及び育鵬社は歴史の主体を明確に「国家」としている。

こうした東京書籍と自由社・育鵬社の基本スタンスの違いは、全編の最後に何を強調しているかにより、はっきりと分かる。東京書籍では、『グローバル化の中で、わたしたちは日本国民としての意識だけでなく、地球に生きる人間（地球市民）としての意識を持つことが求められています。』としている。これに対し自由社では、『独自の文化と伝統をもつ日本が、自国の安全と自由をしっかりと確保しつつ、今後、世界の平和と繁栄にいかに貢献していくかが問われている。』とし、さらに、最後に日本の歴史を『古代と近代において、2回にわたり、懸命の努力で国家を建設しました。古代においては、中国文明に出合い、それを積極的に取り入れるとともに、大陸の強大な帝国の脅威を感じ、自立した律令国家を建設しました。近代においては、西洋文明に出合い、それを積極的に取り入れるとともに、西洋の外圧に対抗して、自立した国家として明治国家を建設しました。』と総括している。育鵬社も同様に、『わが国は、過去の歴史を通じて、国民が一体感をもち続け、勤勉に、礼節を重んじてくるなかで、さまざまな困難を克服し、世界でも稀な安全で豊か

な国をつくってきました。これからもすぐれた国民性を発揮して国内の問題を解決するとともに、世界の人々から信頼され、感謝されるような国際貢献に努めていくことが求められています。』として、日本人の優れた「国民性」を強調している。

このように、自由社・育鵬社と東京書籍の記述上の最大の差異は、守るべき価値ある国家である「日本」とそこに生まれ住む「日本人」を主語として歴史を描くか、「日本」という国家を軽視し、地球市民である「人々＝個人」を主語として歴史を描くかの違いである。あくまで「個人」を主人公として歴史を描こうとする東京書籍の教科書には、全般を通じて「国防」の対象となる「守るべき価値ある国家＝日本」という観念そのものが、すっぽりと抜け落ちているのである。

## ■隋を「友好国」として扱い、古代日本人の国防意識を低いものとして扱う

隋の中国統一に関して東京書籍の教科書では、『中国では6世紀の末に、隋が南北朝を統一して強大な帝国をつくり上げました。そこで日本は、東アジアでの立場を有利にし、隋の進んだ制度や文化を取り入れようと・・・』として、あたかも隋が「友好国」であるかのように記述している。これに対し、自由社の教科書では、『6世紀の末、大陸では重大な変化がおこった。589年、隋が中国全土を約300年ぶりに統一したのだ。強大な軍事力をもつ隋の出現は、東アジアの国々にとって大きな脅威だった。朝鮮半島の百済、高句麗、新羅は、隋に冊封された。日本も、これにいかに対処するか。態度をせまられることになった。』として、これを明確に「脅威」としてとらえている。

このように、冷厳な国際情勢を前提とした自由社の教科書では、遣隋使と天皇号の始まりに関する記述でも、『太子は、手紙の文面で対等の立場を強調することで、隋に決して付属しないという決意を表明したのだ。』、『皇帝の文字をさけることで髓の立場に配慮しつつも、「皇」

の文字をみずからの称号に使うことで、両国が対等であることを表明したのである。これが、天皇と言う称号が使われた始まりだった。』、『・・・以来、日本は天皇の称号を使い続けたが、これは、東アジアの中で、華夷秩序から脱し、自立した国家として歩むという宣言の意味をもった。』として、脅威に対する国家としての対応を明確に述べている。同様に育鵬社の教科書でも、コラムの中で「天皇」の称号が使われ始めたことを『中国の影響力からぬけ出そうとする政治的な動き』と位置づけている。

一方で、隋を脅威として扱わない東京書籍の教科書では、当然のことながら天皇号の始まりについても、『・・・中国や朝鮮に学んで、大王（天皇）を中心とする政治制度を整えようとなりました。』、『(注釈) 大王はのちに「天皇」と呼ばれるようになりましたが、その時期については遣隋使を派遣した推古天皇のころという説と、大王（天皇）の地位がおおはばに高まった天武、持統天皇のころ（7世紀後半）という説とに分かれています。』として、その目的が全くわからない記述となっている。これでは、隋という脅威に対する日本の国家としての主体性が全く無視され、当時の日本が華夷秩序のもとにあったかのような誤った認識を抱かせることになる。実際には、日本は古来から華夷秩序を離れた独自の文明圏を築いてきたのであり、それを明確に宣言したものこそが、この天皇号の使用だったのである。

日本が律令国家への道を歩むことになる最大の要因が、唐の脅威であった。自由社教科書の囲み記事『敗戦を教訓にした律令国家』によれば、『天智天皇は敗戦の原因を分析し、唐帝国に学んで、律令の整備と中央集権化を目指した。天智・天武天皇は東アジアの興亡と敗戦の経験を教訓に国づくりを進めた』のである。白村江の戦い（六六三年）で唐・新羅連合軍に敗れた後、『唐と新羅の襲来を恐れた日本は、九州に防人を置き、水城を築いて、国をあげて防衛につとめた。また、中大兄皇子は都を飛鳥から近江に移し、即位して天智天皇となった（自由社）』のであるが、ここで自由社の教科書は、当時の兵役制度について『防人は、諸国から集められ、九州北部の沿岸と壱岐、対馬に配置された兵士で、3年交代で防衛の任についた。東国の兵士が多かった』として、その任

務を『北九州の海辺を守る。』（育鵬社は『北九州沿岸の防衛』）と明記している。これとは逆に、東京書籍の教科書では、『兵役で兵士となった人の中には、防人として、九州北部の防衛に送られるものなどもありました。これらの負担をのがれるために逃亡するものも出てきました。』として、あたかも当時の人々が低い国防意識で、いやいやながら防衛の任務についていたとの印象を与え、古代の日本人を貶めている。これに関連して、育鵬社の教科書では「万葉集」に収められた防人の歌を四首紹介しているが、いずれも

『葦垣の 隈処に立ちて 吾妹子が 袖もしほほに 泣きしそ思はゆ』

のように、遠い故郷に残してきた家族に想いを馳せた、辛く悲しい思いをつづるものばかりである。いつの時代でも、個々の兵士の私的な心情とはこのようなものであるが、辺境での淋しい生活に耐えて、国防の責務を果たそうとした伝統的な日本人の「公に奉じる精神」や高い国防意識を無視することが無いように、育鵬社の歴史教科書には次の一首を追加してもらいたいものである。

『大君の命かしこみ 磯に触り 海原渡る 父母を置きて』

その後の律令国家の立て直しにおいても、東京書籍の教科書では、『このころには東アジアの国々の間での対立がゆるんだため、東北地方や九州地方以外では一般の人々の兵役をやめ、・・・』として、兵役義務の廃止しか記述していないが、実際には自由社の教科書にあるように、桓武天皇は、農民にとって大きな負担となっていた兵役の義務を一部廃止する代わりに、郡司の子弟による新しい軍隊『健児制』をつくったのであり、これが後に武士の発生へとつながっていく。このことは、全ての歴史教科書で明記すべき重要な史実である。

■蒙古の脅威を否定し、その「侵略」を「成長」と表現する「地球市民

## 的友愛精神」

日本史上最大の武力侵攻である元寇は、国防意識をはぐくむ上で重要な題材である。東京書籍の教科書では、『・・・モンゴル高原で遊牧生活をしてきたモンゴル民族から出たチンギス・ハンは、部族を統一して国を建設しました。その子や孫は、その国を広大なユーラシア大陸の東西にまたがる大帝国（モンゴル帝国）に成長させ、5代目のフビライ・ハンは、都を大都（北京）に移し、国号を元と定めて皇帝になりました。』として、この遊牧騎馬民族特有の残虐極まりない大侵略を「成長させ」という表現で記述し、当時のユーラシア大陸全域でモンゴル帝国が重大な「脅威」であったという史実を打ち消している。

これに対し、自由社では、『モンゴル帝国は、無敵の騎馬集団を各地に侵攻させ、またたくまに、西アジアから中国までユーラシア大陸の東西にまたがる広大な領土を築いた。この動きにヨーロッパ人もおびえ、モンゴル人を恐れた。』として、史実に基づく脅威認識で記述している。

二度にわたる蒙古襲来に関しても、東京書籍は、『フビライは朝鮮半島の高麗を従え、さらに日本を従えようと、たびたび使者を送ってきました。これを執権の北条時宗が退けたため、元は高麗の軍勢も合わせて攻めてきました。・・・このように、戦闘はありましたが、元と日本との交易は行われており、銅銭や綿織物、陶磁器など、さまざまな文物が日本に輸入され、おおきな影響を与えました。』として、執権・北条時宗の存在を軽視する一方、日本と蒙古は常に友好関係を維持していたかのような記述である。あくまで蒙古を脅威として認識したくない「地球市民としての友愛精神」に満ちた記述である。これに対して自由社では、『フビライは、東アジアへの支配を拡大し、独立を保っていた日本も征服しようとしてくわだてた。フビライは、まず日本にたびたび使いを送って、服属するように求めた。しかし、朝廷と鎌倉幕府は一致して、これをはねつけた。幕府は、執権の北条時宗を中心に元の襲来に備え』、『幕府が御家人に防塁の建築や異国警固番役などを命じて外敵への備えを強化した』とし、蒙古を明確な「脅威」としてとらえる一方で、当時の日本

人が執権・北条時宗の優れたリーダーシップの下に「国家」一丸となって対処したことを述べ、続けて、『元・高麗連合軍の侵攻』により『日本側は略奪と残虐な暴行の被害を受け、新奇な兵器にも悩まされた。しかし、鎌倉武士は、これを国難として受け止め、よく戦った。』として、蒙古襲来の実態と、日本の独立を守った鎌倉武士たちの勇戦奮闘ぶりを子供たちに紹介している。

## ■自ら明の臣下となった足利義満の売国行為をひた隠す東京書籍の歴史教科書

政治・外交工作による属国化を目論む「間接侵略」についても、東京書籍の教科書がこれを脅威ととらえようとしない態度は一貫している。室町時代、将軍・足利義満と明との関係は、万世一系・君臣一体の誇るべき日本の国体が破壊され、明の属国になりかねない危機的状況をもたらした。東京書籍の教科書は、この史実に全く触れることなく、次のような「日明友好関係」として記述している。

『14世紀に元を北方に追い出し、漢民族の王朝を建国した明は、東アジアやインド洋諸国との間にも、伝統的な朝貢体制を広く求めました。これを知った室町幕府の将軍足利義満は使者を派遣して国交を開きましたが、その際に義満は「日本国王源道義」と呼ばれ、日本国王として待遇されました。道義とは義満が出家したあとの名前です。義満の目的は日明貿易による利益であり、日本からは刀剣などの武具、おうぎや屏風などの工芸品、銅、硫黄などの鉱産物が輸出され、明からは銅銭や生糸、高級な織物、書画などの唐物を輸入しました。この唐物は幕府の御所などにかざられました。』

これに対し、自由社の教科書では、当時の情勢を明確な間接侵略の危機として、『室町幕府は、課税権、市政権、裁判権など、朝廷の権限の多くを吸収して、統一政権の性格を強めた。他方で明との貿易の利益のために、明の皇帝の冊封を受け、「日本国王」の金印をもらい、自らを



『日本国王臣源道義』と名乗って、臣下として屈従する姿勢を見せた。』と記述し、さらに囲み記事『「日本国王」になった足利義満』で次のように詳述して、当時の情勢がいかに関国家的な危機状態にあったかを説いている。

『義満は明の皇帝にたびたび国書を持った使いを送り、1402年、「日本国王」に任命された。「国王」という称号は、古代以来中国の服属国であることを示すもので、明は義満に金印と明の暦をあたえた。暦を受け取ることは、服属を認める象徴的行為だった。義満の死後、4代将軍義持は明と国交を断絶し、冊封関係は義満一代限りで終わった。』

不思議なことに東京書籍の教科書では、義満は「日本国王源道義」と呼ばれたとあり「臣」という字が欠けているが、これは単なる誤植であろうか。それとも余りに明白な華夷秩序を隠すため、執筆者が意図的に「臣」の字を抜いたのであるだろうか？

さらに、史実では、明の臣下として「日本国王」になった足利義満は、上皇と同じ地位を獲得し、妻を天皇の代理の母とした。その上で、三男を皇太子に立てようとし、足利家が王位をうばう計画を進めたが寸前で急死した。つまり、明の威光を後ろ盾にして自分の息子を天皇の地位につけようとしたが、突然の病にたおれて野望を果たせず他界したのである。このように、足利義満とは、称徳天皇の世において皇位を我がものにしようとした弓削道鏡をもしのぐ「無道」の輩であり、わが国史上、最悪の犯罪人であった。義満がもたらそうとしたものは、我が国に連綿と続く皇統の断絶（国体の破壊）であり、シナへの属国化であった。自由社の教科書は、検定前の申請本において、こうした足利義満による国体破壊工作について記述していたのだが、残念なことに、文部科学省の検定官により全て削除されてしまった。

■十六世紀以降のキリスト教宣教師来日の目的を「慈善事業」とする東京書籍

近世の日本を襲った最大の脅威は、ヨーロッパ人の世界進出であった。自由社や育鵬社の歴史教科書では、当時のポルトガルとスペインによる地球分割計画である「トルデシヤス条約」について『1494年、大西洋を東西に分ける1本の線が引かれた。この線から東方で発見されるものは、すべてポルトガル王に属し、西方で発見されるものはすべてスペイン王に属するという取り決めが、両国の間で結ばれた。(自由社版教科書)』として、紹介しているが、東京書籍の教科書では、この条約について全く触れていない。

ヨーロッパ人の来航による鉄砲の伝来についても、東京書籍の教科書では、『堺(大阪府)や国友(滋賀県)などでは、刀鍛冶の職人によって鉄砲がつくられるようになりました。鉄砲の普及は、戦い方の変化と築城技術の向上をもたらし、全国統一の動きを促進しました。』と簡単に述べるだけである。一方、自由社や育鵬社の教科書では、さらに『やがて日本は世界一の鉄砲生産国となった。(自由社)』、『国産品の命中率はヨーロッパ製をしのいだという。(自由社)』、『鉄砲が急速に普及した背景には、日本人の高い技術力がある。(育鵬社)』、『鉄砲の大量生産は、製鉄技術や鉱山開発などの技術革新を生んだ・・・(育鵬社)』といった史実を紹介することにより、当時の日本人による優れた武器開発という「国防上の偉業」こそが、西欧諸国の武力による日本の植民地化を抑止したことを教えている。

宣教師によるキリスト教の布教の実態について、自由社版教科書の申請本では、『最初のキリシタン大名となった九州の大村氏は、長崎を開港してイエズス会に寄進した。長崎はキリシタンによって要塞化されて、(※注 検定後は「の影響力が強く」に修正)貿易と布教の拠点となり、その後もヨーロッパとの窓口の役割を果たすようになった。キリシタン大名の保護を受けて、長崎、山口、京都などには教会(南蛮寺)もつくられるようになり、キリスト教は西日本を中心に広がった。』として、日本の土地の一部が外国により専有されていた事実を脅威として認識している。これに対して東京書籍の教科書では、「宣教師たちは、長崎や豊後、京都などの各地に教会、修道院、学校、病院、孤児院などを建

設し、布教や慈善事業を行いました。このため、キリスト教は民衆の間にも信仰が広まり、17世紀のはじめには、信者が30万人をこえるようになりました。」として、キリスト教の布教を親善的なものであったと記述している。

南蛮貿易を重視し、キリスト教の布教を認めていた豊臣秀吉が、一五八七（天正十五）年に突如としてバテレン追放令を発し、キリスト教を禁止する政策に転換した経緯についても、自由社の教科書では、『そのころ、フィリピンを拠点にしていたスペインの宣教師たちの間には、キリスト教を広めるため南アメリカで行ったのと同じように、中国や日本を武力で征服する計画があったといわれる。』としてその脅威を明らかにし、囲み記事の『バテレン追放令（一部要約）』のなかでも、『一 バテレンが地元の人々を近づけて信者にし、彼らをそそのかして神社や寺院を打ちこわしているのは、これまでに一度もなかった悪事である。』との条項を紹介して、キリスト教宣教師の影響力と、それへの秀吉の警戒心を明示している。

こうした点については、育鵬社のみならず、東京書籍の教科書でさえも、『秀吉は、九州を従えたあと、長崎がイエズス会に寄進されていることを知り、日本は「神国」であるとして宣教師の国外追放を命じました（バテレン追放令）。キリスト教の布教が、スペインやポルトガルの侵略政策と結びついていることを危険視したのです。』として、妥当な脅威認識に基づき記述している。しかし、江戸幕府がキリスト教禁止令を出す部分になると、東京書籍の教科書は、『1612年、幕領にキリスト教禁止令（禁教令）を出し、迫害を開始しました。神への信仰を領主への忠義より重んじるキリスト教の教えが、幕府の考えに反していたためです。』として、これを単なる宗教弾圧としている。各時代を通じた記述に全く一貫性がないのも、このような反日教科書の特徴である。この点で、自由社の教科書は、『遅れてやってきたオランダとイギリスは、日本との貿易を求めたが、キリスト教の布教はしないと約束した。そして、競争相手のスペインなどが、キリスト教を広めて日本を征服しようとしていると幕府に告げた。幕府は1612（慶長17）年、キリスト教禁

止令を出し、その後スペイン船の来航も禁止した。』として、この間の経緯を正しく説明している。

鎖国についても、東京書籍の教科書では、その目的、狙い、意義といったことには何ら触れていないが、史実において『スペイン、ポルトガルなどが世界各地に植民地を広げているなかで、鎖国はわが国の独立を守り、平和を守るための政策（育鵬社）』だったのであり、『鎖国の最大のねらいは、外国から国を守るために、キリスト教の影響力を排除すること（自由社）』なのであった。史実をきちんと教えない教科書を「歴史教科書」とは呼ばない。

## ■おわりに

人類の歴史は、国家どうしが生存と繁栄を追求し、国益を求めてぶつかり合う「戦い」の繰り返しであり、国家とは常に内外の敵に囲まれる宿命にある。日本を取り巻く周辺諸国は、昔も今も、決して「平和を愛する諸国民」でも、「公正と信義」の国でもない。この弱肉強食、優勝劣敗の原理に基づく冷厳な国際環境にあって、「友愛」や「地球市民」のような美辞麗句は、強国が弱国を意のままに操るためのツールに過ぎない。

かつての日本人は、こうした世界の現実を正しく理解し、日本を取り巻く「脅威」を至当に認識し、それらに賢明に対処しながらも、守るべき価値ある国柄を築きあげてきたのである。こうした先人の叡智から学ばない歴史教育に何の意味があろうか。